（第３種郵便物認可）　2020年（令和2年）10月29日（木曜日）　読売新聞

第69回 読売教育賞

県内３教諭に優秀賞

教育分野で優れた業績を上げた個人や団体に贈られる「第69回読売教育賞」が決まり、県内からは、小中学校の教諭３人が優秀賞に選ばれた。それぞれの業績と喜びの声を紹介する。

◇特別支援教育部門
特別支援教育コーディネーターを中心とした「校内支援体制」の構築について

障害ある子どもの学校生活支援

新宮市立城南中教頭　久安 孝典さん 42

障害がある子どもたちが中学に進学する際、適切な支援を受けられるよう、校内外の関係者との連絡・調整を担う「特別支援教育コーディネーター」を2007年から務める。

小学校との連携強化や教員間で情報共有を深め、生徒の受け入れと初期指導がスムーズになったことなどが評価された。「教員生活で関わってきた多くの人に感謝したい」と謙虚に受賞を喜ぶ。

障害のある子にとって、環境の変化に対する不安は大きい。このため、毎年、3学期になると校区の小学校を訪問し、6年生の授業を参観した。気になった子の様子はメモし、担任からも聞き取る。その後、教員間で情報を共有し、支援のあり方を具体的に検討していく。

安心して中学生活をスタートできるよう、保護者や本人とは事前に面談して信頼関係を築き、受け入れ態勢を整えた。入学後も、支援が必要な生徒には、通常の授業とは別の「通級指導」で寄り添い続けた。不登校気味だった生徒と会話を重ねるうち、学校に来られるようになったことがあり、「あの時はうれしかった」と目を細める。

管理職となった昨年度からは、生徒支援に関する校内での会議の定例化と短時間化、事例に応じた資料の作成など、より効果的で、教員が積極的に意見を述べられるような運営を心がけている。若手教員が自ら「気になる子がいるので会議を設定してほしい」と言ってきたこともある。着実に変化が表れてきていると手応えを感じている。

「つなぐ」という言葉を大切に、特別支援教育に関わるトピックを記した「つながり通信」の発行を、前任校から毎月1回続けている。「学校全体で取り組まなければ子どもたちの支援はできない。これからは、若い先生たちに経験を伝えていくのも自分の役割」と力を込める。

「つながり通信」を手に「チームで取り組まないと子どもたちの支援はできない」と話す久安教頭（新宮市で）

■地域社会教育活動

「中津の未来を創りだせ！『地元高校生のオリジナルまちおこし』」

大分県立中津東高校教諭　岡崎博吉

「地域社会と連携したプロジェクションマッピング！」

静岡県立掛川西高校教諭　吉川牧人

■ＮＩＥ

「社会と自分との関わりを見つけ、生き方を考える生徒の育成」

愛知県刈谷市立朝日中学校教諭　河村智美

「新聞広告『最後だとわかっていたなら』を主教材とした道徳科授業の開発と実践」

佐賀県唐津市立肥前中学校教頭　光武正夫

■特別支援教育

「『英語クラブ活動』で育てる『小さな国際人』」

津田塾大学国際関係学科（東京都小平市）インクルーシブ教育支援室ＩＥＳ研究アドバイザー　股野麗子

「特別支援教育コーディネーターを中心とした『校内支援体制』の構築について」

和歌山県新宮市立城南中学校教頭　久安孝典

■音楽教育

「少人数での音楽学習をより魅力的にしていくために」

長野県松本市立奈川中学校教頭　小町谷聖

「地球音楽皆平等を願う　出前授業『地球音楽の旅』」

地球音楽庵小節街道音造り工房（兵庫県姫路市）主宰　大原啓司